

# PPP授業とTBL授業の文法学習における効果の比較検証

川本祥也

(奈良教育大学大学院教育学研究科)

佐藤臨太郎

(奈良教育大学英語教育講座)

## Examining Effects of PPP and TBL on Learning Grammar Rules

Yoshiya KAWAMOTO

(Graduate School of Education, Nara University of Education)

Rintaro SATO

(Nara University of Education)

**要旨：**近年、タスクを用いたTBL (Task-Based Language learning) 授業が学習者のいわゆるコミュニケーション能力育成に効果的であるとの観点から大いに注目を集めている。しかし、日本のような、教室外での英語使用場面がほとんどないEFL (English as a Foreign Language) 環境においては、PPP (Presentation-Practice-Production) の流れに沿った授業の方がよいという指摘もある。本研究では、PPP授業とTBL授業の文法学習における効果を比較検証した。結果から、両授業とも文法学習において一定の効果が見られたが、文法知識の習得や英作文における正確さを重視するならばPPP授業、英作文における流暢さや内容の豊かさを重視するならばTBL授業の方が効果的ではないかとの示唆が得られた。また、多様な性格や学習への動機づけを持った学習者がいることを考慮し、さまざまな形式の授業を組み合わせる活用すべきであるということが示唆された。

**キーワード：**文法指導 Grammar Instruction、PPP、TBL

### 1. はじめに

最近の英語教育では、「コミュニケーション重視」の傾向があるといえる。2009年3月に発表された高等学校学習指導要領において、外国語科の目標として「コミュニケーション能力を養う」と明記されていることや、授業科目再編成によって「コミュニケーション英語」や「英語会話」が新しく設けられていることから、この傾向が読み取れる。このようなコミュニケーション重視の傾向から、近年では、第二言語習得研究に基づいたタスクを用いた授業、つまりTBL (Task-Based Language Learning) 授業が注目を浴びているが、一方では、文法指導の際には、明示的に文法項目を指導し、練習を行い、最後にその項目を用いた活動を行うというPPP (Presentation-Practice-Production) の流れに沿った授業が一般的に行われているのも事実である。

本研究では、文法学習において、PPP授業とTBL授業ではどのような効果の違いがあるのか、どちらの授業法の方が適切であるのかを、両方法による授業、文

法および英作文テスト、学習者へのアンケートを実施し、その結果を通じて比較検証する。

### 2. 先行研究

#### 2. 1. PPP

PPP (Presentation-Practice-Production) とは、(1) 新出語彙・文法の明示的説明 (Presentation)、(2) 正確さに焦点を当てた練習 (Practice)、(3) より自発的に言語を使用し、意味に焦点を当てた言語使用活動 (Production)、という流れに沿った授業のことをいう (Skehan, 1998)。明示的知識によって得られた宣言的知識は、練習や言語に触れることを通じて、手続き的知識へと発展する (Anderson, 1993; Sharwood Smith, 1981) と言われているが、この考え方からみても、PPPの授業展開は妥当であるといえるだろう。また、Practiceの段階で行われる模倣、リピート、パターン練習は、宣言的知識が手続き的知識へと発展する際に必要不可欠だとも言われている (Yamaoka, 2005, 2006)。

しかし、言語習得はこのようには起こらない (Willis, 1996)、PPPは意味について考えない指導法である (White, 1988) といったTBL支持者からの批判的な意見もある。

## 2. 2. タスク (task) ・TBL

Ellis (2003) はタスクを (1) 意味に焦点が当てられていて、(2) 現実社会での言語使用を意識し、(3) 4技能 (読む、書く、聞く、話す) を用い、(4) 認知的プロセスを要する、活動であると説明している。高島 (2005) によれば、タスクは現実社会での言語使用を学習者に教室内でシミュレーション的に疑似体験させる言語活動であるという。このようなタスクを中心的に使用する学習をTBL (Task-Based Language Learning) という。

TBLは言語習得に効果的であるという意見がある一方で、批判的な意見もある。Bruton (2005) は、日本のような教室外では英語を使用する機会がほとんどないEFL (English as a Foreign Language) 環境ではTBLは適さないという。また、日本人学習者は目標語彙、文法をTBLではうまく使うことができない (高島, 2005)、TBLは試験のためではなく、教室外の実際の世界での英語使用を目標としている (Willis & Willis, 2007) ため、入学試験などに向けての学習には適さないといった批判もある。

## 2. 3. Focus on Form

PPPとTBLの折衷的なアプローチも提案されている。和泉 (2009) では、文法や語彙などの言語形式に焦点を当てた伝統的教授法を批判している。これは、文法を明示的に説明し、練習させ、活動の中で使用させるPPPを批判しているとも言える。そして、意味に焦点を当てた授業のなかで、内容からかけ離れることなく、形式面にも注意を払わせるアプローチ、つまり、文法指導とコミュニケーション指導の両面を量的にも質的にも取り入れたアプローチとしてFocus on Formを提案している。

しかし、本研究では、純粋にPPPとTBLの文法学習における効果の違いを比較検証することを目的としているため、Focus on Formについては深く触れないものとする。

## 3. 研究課題

本研究における研究課題は、以下の3点である。

- (1) PPP授業、TBL授業は、それぞれ文法学習において効果はあるか。
- (2) PPP授業を受けた学習者とTBL授業を受けた学習者とは、文法テスト、英作文テストにおいて、

結果にどのような違いがでるか。

- (3) 学習者はPPP授業、TBL授業に対して、どのような感想を持つか。

## 4. 研究方法

### 4. 1. 参加者

本研究の参加者は、国立大学学部2回生で教養英語を履修している32名である。32名の学生は16名ずつの2クラスに分けた。なお、事前テスト (4.3. 参照) の結果より、両クラスの学生の英語力には統計的に有意な差はなかった。

### 4. 2. 参加者

2クラスとも3回、表1のような展開、手順 (時間) で授業とテストを実施した。指導する文法事項は「仮定法過去」とした。

表1 各クラスにおける授業とテストの実施手順

展開	Aクラス (PPP 授業)	Bクラス (TBL 授業)
1回目	事前テスト (30分)	
	PPP 授業 1 (50分)	TBL 授業 1 (50分)
2回目	PPP 授業 2 (50分)	TBL 授業 2 (50分)
	事後テスト (30分)	
3回目	遅延テスト (30分)	
	TBL 授業 (40分)	PPP 授業 (40分)
	アンケート (10分)	

2回目の授業とテストは1回目の授業とテストの1週間後であり、3回目の授業とテストは2回目の授業とテストの1週間後である。1、2回目の授業では、AクラスではPPP授業、BクラスではTBL授業を実施し、3回目の授業では逆に、AクラスではTBL授業、BクラスではPPP授業を実施した。テストは両クラスとも同じものを使用した。

なお、授業者およびテスト採点者は両クラスとも筆者である。

### 4. 3. 参加者

テストは文法的知識を問うもの (誤文訂正) と、英作文を書かせるもの (条件付き自由英作文) の2種類を用い、事前、事後、遅延テストとも同形式のものを用いた。

テストは2種類のを合わせて30分で実施した。(Appendix参照)

- (1) 誤文訂正・・・20問
  - ・各英文の下線部に誤りがあれば正しく訂正し、誤りがなければ「(誤り) なし」と書かせる。
  - ・仮定法に関する問題は15問で、事前、事後、

遅延テストの3回とも同じ英文を使用した。

- ・ 錯乱肢として、仮定法以外の文法項目に関する問題を5問出題し、各回のテストで異なる英文（文法項目）を使用した。

#### (2) 条件付き自由英作文・・・1問

- ・ 与えられた情報を用いて自己紹介の英文を書かせる。与える情報は各回のテストで異なるものを使用した。
- ・ 与えられた情報には、仮定法を使うべき個所が1つずつある。
- ・ 与えられた以外の情報も、できるだけたくさん書くように指示した。

#### 4. 4. 授業展開

本研究では、先に述べたとおり、指導する文法事項を「仮定法過去」とした。これは、仮定法過去が既習項目ではあるが、日本人学習者にとって使う場面が少なく、習得度が低い文法項目であると考えたからである。また、授業は両クラスとも原則として英語による授業を行い、教材は授業者が作成したハンドアウトを使用した。授業のトピックは両クラス共通で、以下の2つを扱った。

- ・ 授業1トピック：If you were the opposite sex, what would you do?
- ・ 授業2トピック：If you were president of your university, what would you do to make your university more attractive?

授業トピックは共通であるが、授業展開（指導方法、生徒の活動）は各クラスで異なり、以下の通りである。各活動の説明として、授業1で行ったことを例にあげる。

※なお、授業1では「性」に関する話題を扱ったため、両クラスとも授業の最後に、genderに配慮したフィードバック（性差によって部活動や職業が決まることはない、と内容のもの）を与えた。

##### (1) Aクラス（PPP授業）

###### ①Small Talk（3分）

学生に「今と逆の性別になってみたいか」と尋ねた後、リーディング教材で扱う話題についてオーラルイントロダクションを行った。

###### ②Presentation（5分）

文法事項の明示的な説明を行った。直説法、仮定法の例文を板書し、両者の意味や動詞の違いを説明した後、リピート練習を行った。

###### ③Comprehension（12分）

1度黙読で読み通した後、簡単な内容確認の質

問を行った。その後、内容・文法事項の説明をし、最後により詳細な部分を問う質問を行った。

###### ④Practice（15分）

まずは、リーディング教材を用いてリピート練習を行い、仮定法の英文を用いてRead and Look-upを行い、基本例文として暗記させた。その後、文法問題演習（空所補充英作文）を行い、文法の定着を図った。

###### ⑤Production（15分）

ペアワークで「今とは違う性別になったら、何をするか」意見交換させたり、自分の意見を英語でまとめさせたりした。

##### (2) Bクラス（TBL授業）

###### ①Pre task 1（5分）

学生に「今と逆の性別になってみたいか」と尋ねた後、授業者自身の「今とは違う性別になったら、何をするか」についての意見を紹介した。

###### ②Pre task 2（5分）

男性、女性のそれぞれがどのような「部活動」に入り、どのような「職業」につくイメージがあるかを、Brainstormingさせた。

###### ③簡単な文法確認（2分）

仮定法を用いた例文を提示し、「この表現をあとの活動で使うと便利である」と伝える程度にとどめる。板書した例文はすぐに消した。

※TBL授業では内容面を重視するため、コミュニケーションに支障をきたす場合を除いては、文法面の指導は行わない。

###### ④Task（38分）

- (1) 「今とは違う性別になったら、何をするか」という質問に対しての意見を個人でまず英語で箇条書きさせた。その後、3～4人のグループを作り、英語で意見交換をさせて、グループで最もおもしろい意見を選ばせた。
- (2) グループで選んだ意見を全員の前で発表させた。
- (3) さまざまな人たちの意見を踏まえたうえで、最終的な自分の意見を英語で書かせた。
- (4) 授業者から学生へ、内容面でのフィードバックを与えた。

#### 4. 5. 分析方法

事前、事後、遅延テストについては、以下の点を分析した。

##### (1) 誤文訂正

本研究では、仮定法に関する問題15問のみを分析対象とした。誤りを正しく訂正できた場合、1点を与えた。

(2) 条件付き自由英作文

- ①英作文の総語数によって、英作文の「流暢さ」を測った。
- ②文法的な誤りのないT-unit数／総T-unit数を計算し、その割合によって、英作文の「正確さ」を測った。

※本研究では、習得が困難だと考えられる「冠詞」の誤り、不注意によるものであると考えられる「複数形のs」「三単現のs」の誤りについては、誤りとは見なさなかった。

5. 結果、考察

5. 1. 誤文訂正

図1は、各クラスの誤文訂正における平均点の推移を示している。

事前、事後テスト間における平均点の推移をみると、両クラスとも得点の伸びがみられる（Aクラス：+7.00、Bクラス：+2.56）。

事後、遅延テスト間における平均点の推移をみると、両クラスで若干得点が低下している。

また、事後、遅延テストにおいてはどちらもAクラスの方が、Bクラスよりも平均点が高い。

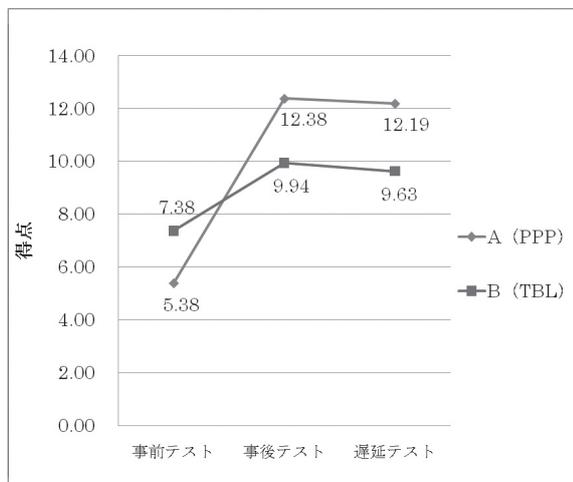


図1. 各クラスの平均点の推移（誤文訂正）

これらの結果から、両クラスとも文法学習には一定の効果があり、PPP授業を受けたAクラスの方がTBL授業を受けたBクラスよりもその効果が大きいことがわかる。

5. 2. 条件付き自由英作文

図2は各クラスの条件付き自由英作文における流暢さの平均点の推移、図3は正確さの平均点の推移を示している。

流暢さについては、事前、事後テスト間における平均点の推移をみると、Bクラスでは上昇しているが、

Aクラスでは低下している。

また正確さについては、Aクラスは全体を通じて正確さが上昇していることが分かる。それに対してBクラスは、事前、事後テスト間では正確さが上昇しているが、事後、遅延テスト間では低下している。

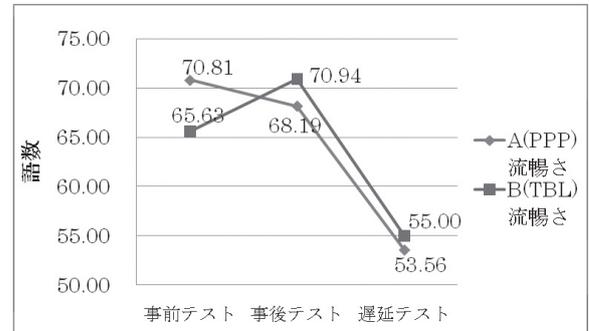


図2. 各クラスの平均点の推移（流暢さ）

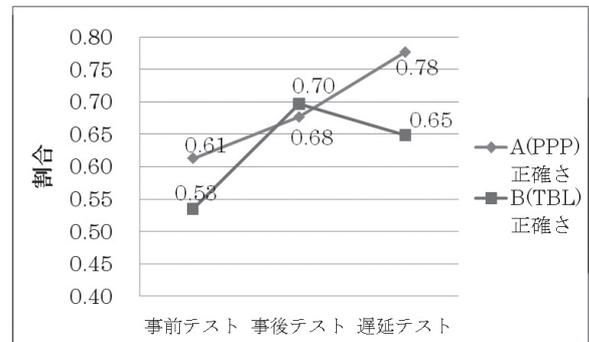


図3. 各クラスの平均点の推移（正確さ）

本研究では、英作文の総語数により流暢さを測定しているため、流暢であるということは総語数が多いことを意味し、総語数が多いことは内容的に豊かであることを意味するといえるだろう。よって、これらの結果から、Aクラスでは正確さを意識したため流暢さ、つまり内容の豊かさが低下し、Bクラスでは流暢さ、つまり内容の豊かさを意識したため正確さが低下したのではないかと考えられる。

5. 3. アンケート

本研究では、PPP授業を2回受けたAクラスではTBL授業を、TBL授業を2回受けたBクラスではPPP授業を3回目の授業で体験させているので、授業後のアンケートを実施し、次の2点について参加者に尋ねた。

- (1) PPPとTBLのどちらの授業が好きか？
- (2) PPPとTBLのどちらの授業の方が英語が身に付くと思うか？

この2点に関してアンケートを行ったのは、学習者の情意と学習効果には関係があるからである。つま

り、学習者が好む、または効果があると思っている授業の方がより効果的であると考えられるのである。

表2、3はそれぞれの質問に対する回答結果をまとめたものである。

表2. 「PPPとTBLのどちらの授業が好きか？」

	PPP	どちらかといえばPPP	同じ	どちらかといえばTBL	TBL
Aクラス	5%	20%	20%	40%	15%
Bクラス	29%	38%	21%	4%	8%

表3. 「PPPとTBLのどちらの授業の方が英語が身に付くと思うか？」

	PPP	どちらかといえばPPP	同じ	どちらかといえばTBL	TBL
Aクラス	10%	25%	15%	45%	5%
Bクラス	25%	37%	21%	17%	0%

また、それぞれの授業に対する主な感想は以下のとおりである。

#### 【Aクラスの参加者の主な感想】

- (1) PPP授業がよい
  - ・ PPPは文法の知識がしっかり身に付く
  - ・ TBLでのグループワークは日本語を使いがちなになる
  - ・ PPPは何を学ぶかが明確で、文法に意識して学習できる
  - ・ PPPは読み書きの力がつく
- (2) TBL授業がよい
  - ・ PPPは実際に英語を話す場面で役に立たない
  - ・ TBLの方が楽しそう
  - ・ PPPでは授業の話題（内容）に意識がいかない
  - ・ TBLはコミュニケーション能力がつきそう

#### 【Bクラスの参加者の主な感想】

- (1) PPP授業がよい
  - ・ TBLにも文法の説明が必要
  - ・ TBLは自分の英語が正しいのか不安
  - ・ TBLはテストに対応できない
  - ・ 人前で話すのが苦手なのでTBLは苦痛

- (2) TBL授業がよい
  - ・ TBLでは楽しく学習できる
  - ・ TBLは英語をたくさん使う機会がある
  - ・ TBLは実践的で役に立つ
  - ・ TBLは英語が話せるようになりそう

表2、3の結果から、両クラスとも、最初2回受けた授業よりも後で受けた授業の方を好む傾向があることがわかる。つまり、普段受けている形式とは異なる授業形式に魅力を感じる学習者が多いようである。また、PPP授業、TBL授業のそれぞれに違ったよさを感じていることもわかる。

これらのアンケート結果からの考察は、先に述べた各テストでの得点にかかわらず、ほとんどの学習者に当てはまることである。

## 6. まとめ、示唆されること

まず、文法学習ではPPP授業、TBL授業の両方とも一定の効果があるということは今回の研究結果からわかる。

ただし、PPP授業では文法知識の習得、英作文の正確さという点でTBL授業よりも効果がみられ、TBL授業では英作文での流暢さ、つまり内容の豊かさという点でPPP授業よりも効果がみられた。この結果からは、正確さを重視するならPPP型授業、流暢さや内容の豊かさを重視するならTBL型授業の方が効果的ではないかと考えられる。

また、アンケート結果からは、学習者の性格や学習への動機づけの違いによって、どちらの授業法を好むかが異なってくることもわかる。そのことから、多様な性格や学習への動機づけをもった学習者がいることを考慮し、いずれかの授業形式にのみ偏るのではなく、さまざまな形式の授業を組み合わせる活用すべきであるということもいえるだろう。

## 7. 研究の問題点・課題

本研究には、いくつか改善すべき問題点がある。まずは、指導期間の短さと参加者の少なさである。授業による効果をより正確に検証するためには、より長い指導期間と、より多くの参加者が必要であると考えられる。

また、使用したテストについても、問題の形式、難易度、条件付き自由英作文で与えた情報の妥当性についても再検討すべきである。

そして、条件付き自由英作文の採点は、本研究では筆者が行ったが、採点の精度を高めるためには、複数の採点者による採点が必要であると考えられる。これらの点については、今後の研究で改善していきたい。

## 引用文献

- Anderson, J. (1993). *Rules of the mind*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Bruton, A. (2005). Task-based language teaching for the state of secondary FL classroom. *Language Learning Journal*, 31, 55-68.
- Ellis, R. (2003). *Task-based Language Learning and Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- 和泉伸一 (2009) 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』 東京：大修館書店
- 文部科学省 (2009) 『高等学校学習指導要領』 京都：東山書房
- Sharwood, Smith, M. (1981). Consciousness-raising and the second language learner. *Applied Linguistics*, 2, 159-169.
- Skehan, P. (1998). *A cognitive approach to language learning*. Oxford: Oxford University Press.
- 高島英幸 (編著) (2005) 『英語のタスク活動とタスク』 東京：大修館書店
- White, R. (1988). *The ELF curriculum*. Oxford: Blackwell.
- Willis, D. & Willis, J. (2007). *Doing task-based teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Willis, J. (1996). *A framework for task-based learning*. Harlow, UK: Longman.
- Yamaoka, T. (2005). From item learning to category learning: A learning process of procedural knowledge of learning. *ARELE*, 16, 21-30.
- Yamaoka, T. (2006). On the importance of imitation and repetition in foreign language learning. *ARELE*, 17, 1-10.

## Appendix

## (1) 事前、事後、遅延テストの誤文訂正問題の例

① If I am you, I would not do that.  
【訂正】 .....

② "Let's leave early, will we?" "No, let's not."  
【訂正】 .....

## (2) 事前、事後、遅延テストの条件付き自由英作文で与えた情報の例

奈良県在住、本屋に勤務、子供のころの夢はパイロット (pilot)、仕事が忙しくて海外旅行に行けない、パイロットならいつでも外国に行けるのに、と思っている。